

失われた時のウェブを目指して

於

平成29年度 京都大学図書館機構講演会
デジタルアーカイブの新たな展開と可能性
－IIFの動向と活用例から考える－

京都大学大学院文学研究科

現代文化学系

情報・史料学専修教授

林 晋

Ver.2017/10/17

15:30-16:15

最初にお詫び

- 16:30から18:00まで、文学部で講義のため、講演後すぐに退席します。
- そのため質疑応答の時間には不在です。
- また、交流会には出席しますが、用事があるため早めに失礼します。
- そのため、すこし早めに終えて、質問の時間を持ちたいと思います。

この講演と、この講演会

- 本講演会はIIFに関する講演会だが、林は、IIFについては、名前を聞いたことがある程度で無知。IIFについての話はしない。
- 林は、元数学者・情報科学者・ソフトウェア工学者で、現在は、思想史、情報社会学などの研究者であるとともに、SMART-GS という手書き歴史資料研究用のツールの開発をしている。
- 思想史の研究対象は、西田幾多郎などの京都学派、ドイツを中心とする19-20世紀数学思想史で、どちらの研究も、「未解読」の手書き一次資料の分析を重視することと、文化史的傾向が強いのが特徴
- そういう林の研究経験を例に、IIFが使われるような、ネット上に公開された画像・テキスト情報のもたらす可能性について論じる。

失われた時の無意識的記録

- 講演の題名「失われた時のウェブを目指して」は、マルセル・ブルーストの長編「失われた時を求めて」からつけた。
- 長編「失われた時を求めて」の最重要テーマともいえるものが「無意識的記憶」。これは、「意識的記憶」と対立的に対となるもので、「マドレーヌの記憶」とも呼ばれる。
 - [脳科学の解説書から](#)
 - [慶応大の講義資料の説明から](#)
- 日記、書簡、蔵書への書き込み、などの一次資料をもとに歴史研究を行っている、「意識的記憶」v.s.「無意識的記憶」と同じように、「意識的記録」v.s.「無意識的記録」という対があることに気づく。

意識的記録 v.s. 無意識的記録

- 意識的記録：
 - 未来に何かを伝えることを目的に意識して行う記録
 - 多くの人たちが、記録と聞いてイメージするもの
 - 普通の意味での「記録」
- 無意識的記録：
 - 未来に何かを伝えることを意識しないで行われた(作られた)、しかし、実質的に未来に何かを伝える可能性を持つ何か
 - 何かを誰かに伝えるために意図的に記録されたが、しかし、それが、その意図とは別の何かを、意図しない誰かに伝える場合なども無意識的記録といえる。

無意識的記録の例

- 本への書き込み
- 原稿の削除線や書き換え
- メモ、ノート
- 後の人に見せるつもりがない日記や手紙
- 土器、化石などの発掘物
 - 考古学、古生物学は、無意識的記録だけを扱う。

林が遭遇した無意識的記録 その1

田辺元と直観主義連続体論

- 西田幾多郎の続く京都学派NO.2哲学者田辺元の社会・政治哲学「種の論理」の成立史を研究していたとき：
 - 京大文学研究科図書館田辺文庫の蔵書書き込みの悉皆調査をした。
 - 悉皆調査なので社会・政治と関係ない蔵書も全部調査したら、全く関係の無いはずの数学、しかも、林が院生のころ専門としていた分野の数学の蔵書に「種」(民族国家のこと)についての書き込みがあり、田辺が直観主義連続体論という特殊な数学をモデルに社会・政治哲学を構築していたという事がわかった。
- これを元に得られた研究成果：
 - 2011年度西田・田辺記念講演「[種の論理再考](#)」
 - 岩波「思想」2012年1月号田辺哲学特集「[田辺元の『数理哲学』](#)」
 - 同上「[<資料紹介>情報の宝庫、二つの田辺文庫](#)」

林が遭遇した無意識的記録 その1(の2)

田辺元と直観主義連続体論

- 直観主義連続体論は、現在生きている日本人で、それを研究し理解していたのは、林が唯一と言って良いほど特殊で歴史に埋もれた理論だった。
- そういう林が京大・文・教授となり、これを目にしたことは奇跡的出来事だったといえる。(田辺文庫の扱いも奇跡だった！実は貴重書が...)
- しかし、これがネットで公開されていたら、また、田辺による日本語の書き込みに英語かドイツ語の訳が付いていれば事情は大きく変わる。それを林が読む必要はなくなる。
 - ちなみに:
 - 書籍自体はドイツ語だが、その本文のコピーライトが切れてないので公開はできない...
 - 書き込みのコピーライトは切れているのだが。
 - 何かの新しい仕組みが必要。
 - これは、WEBアーカイブの技術的課題！どなたか妙案は？

林が遭遇した無意識的記録 その2

アンドレ・ヴェイユの手紙

- 林は、長年行っている19-20世紀の数学思想史の研究の中で、1931年に発表された[ゲーデルの不完全性定理](#)というものが、プラトン以来の数学と哲学の密接な関係性を最終的に断ち切ったという説をたてた。
- その説を主張するためには、1930年当時は、まだ哲学的問題に入れ込んでいた、数理論理学以外の分野で偉大な数学者、特に若い数学者がいたという証拠が必要だったが、適当な例が見つからなかった。候補は、1931年に山岳事故で死亡した、整数論でも将来を嘱望されていた数理論理学者ジャック・エルブランだったが、本当に将来を嘱望されていたという証拠が見つからなかった。
- ところが、ある日、エルブランの日本語Wikipediaの解説を見ると、なんと、その証拠が記載されていた！それが、この[来歴・人物](#)の最後にあるアンドレ・ヴェイユから志村五郎への手紙の和訳である。

林が遭遇した無意識的記録 その2(の2)

アンドレ・ヴェイユの手紙

- アンドレ・ヴェイユは、20世紀を代表する数学者の一人で、その妹で著名な哲学者シモーヌ・ヴェイユが劣等感を感じていたらしい文理両道の天才。
- また、「私が知るまともな哲学は古代インド哲学だけだ」と言っ
てはばからない辛辣な人物でもあった(彼はサンスクリット語
の古典などを少年のころから読みこなしていた)。
 - シモーヌが哲学者だったことに注意！！
- そのヴェイユのエルブラン評は、驚くほどポジティブ。ヴェイユ
は、数理論理学を嫌っていたのでも有名なもので、それにもか
かわらず、この評価は、林の仮設の強いサポートとなった。

林が遭遇した無意識的記録 その3

古地震学：みんなで翻刻

- これは、昨年度末まで林の学生だった歴博研究部助教橋本雄太氏と、京大古地震研究会による成果。
 - なぜ、こんなことが起きたのかは、こちらを参照。
 - 林が代表の科研費研究「古文書のウェブを目指して」の研究分担者たちの成果。
 - **古文書のウェブは「失われた時のウェブ」の一部**
- 地震などの災害情報を含む江戸期以前の和本を、クラウドソーシングで翻刻するといったもの。草書の和本で始めて成功したクラウドソーシング。
- これが進めば、地震学者、地方公共団体、個人などが、古文書をサーチして防災に役立てることができるかもしれない。
 - 歴史学が人命を救うかもしれない！
 - 歴史学(人文学)が社会に役立たないというのは現実を知らない意見。
 - 実は、国境の決定、歴史問題などで、歴史学は政治的でさえある。
- 東寺百合文書などへの応用の検討も始まっている。

真の「失われた時のウェブ」に必要なもの

- 古文書、古地図、掛け軸、色紙、など「無意識的記録を含みえるもの」すべてのデジタルコピー
- そのサーチとアノテーションとリンク: 今の「HTMLテキストのウェブ」でできる操作の対応物。
- サーチの方式の候補
 - Google Books や、みんなで翻刻、のように、OCRやクラウドソーシングで翻刻を作成し、それでサーチする。(一番現実的で、かつ、高速)
 - 画像の類似性でサーチする(林のプロジェクトから例を二つ):
 - [京都学派アーカイブ 西田幾多郎資料](#)
 - SMART-GS による田辺元講義ノートの研究
- 画像のアノテーションと、そのリンクの方式
 - たとえば、SMART-GSでも可能。既存。

真の「失われた時のウェブ」に必要なもの その2

- 田辺元史料についての[p.9](#)で書いたように、日本語の資料が、例えばドイツ語、英語などでサーチできる必要がある。
- つまり、言語間のバリアを無くす必要がある。(言語グリッド?)
- この例に限らず、あらゆる情報と情報の間の障壁を下げることで、それが「失われた時のウェブ」を築くための最大のタスク。
 - それには、当然、社会的要因が絡みつく。
 - 閉鎖的隠蔽的傾向が強い、この国では、実現しがたいこと。
 - しかし、すでに始まっている、閉鎖性、隠ぺい体質による日本の学術、社会、行政の停滞を防ぐためにも、これは実現されなくてはならない。

真の「失われた時のウェブ」に必要なもの その3

- 下がった障壁の上を通り抜けて、「無意識的記録」を探查する何らかのサーチの手段。
- おそらくは、多種多様なサーチの手段。
- 検索すべきものが「無意識的記録」なので、それがどういうものか、予測できない。
- したがって、たとえばダブリンコアのような、予め定義された構造的データではありえない。
- それぞれの歴史研究のケースで、検索をしたいもの、その方法が決まる。
- 色々な基本的なもの、たとえばテキスト検索や画像検索を組み合わせることにより、テーラーメイドされる検索。

最後に: IIFに要望したいこと

- その形を、予め決めておいたり、予想できない「無意識的記録」の検索に対応できるようなオープンで柔軟なスタンダードの策定。
- つまり、人文学のプロの使用を強く意識した、スタンダードということ。
 - 現在のIIFは、ライブラリアンやアーキビストの視点で行われているように林にはみえる。
- もし、「プロの研究を意識した無意識的記録の検索」の可能性を考慮して、スタンダードの策定・改訂をしてもらえれば、世界の歴史家、人文学者は、IIFを支持することだろう。